ICT 海外ボランティア会会報

No. 62

2016 年 1 月 1 日（金）

Home page：http://www.ictov.jp/

e-mail info@ictov.jp

目次

◆新春巻頭言
もう一度「百人一首」を楽しんでみませんか
ICT 海外ボランティア会特別顧問　元駐ケニア大使　宮村　智氏

◆新春報告
JICA　青年海外協力隊発足五十周年記念式典に参加して
ICT 海外ボランティア会事務局

◆特別寄稿
図横糸を通して物を見る
ICT 海外ボランティア会顧問　石井　孝氏

◆海外グラフィティ
ラマンチャの男
日本ベンダーネット社長　エッセイスト　田上　智氏

◆新春特集
NTT 民営化直後の海外技術協力活動の実績
ICT 海外ボランティア会事務局長　加藤　隆氏

◆第 20 回 海外情報談話会 開催模様
事務局

◆ 第 21 回 海外情報懇談会 開催のお知らせ
事務局

新春巻頭言

もう一度「百人一首」を楽しんでみませんか

ICT 海外ボランティア会特別顧問　元駐ケニア大使
宮 村　　智

ICT 海外ボランティア会の皆様、新年明けましておめでとうございます。本年もよろしくお願いいたします。新春と言えば、昔は多くの家庭で百人一首のかるた取りを楽しんだものでした。私の生家でも正月三が日の夜は一家揃って、時には近所の人々も交えて、かるた取りに興じました。子供同士で坊主めくりもやりました。しかし、大学生になった頃から、百人一首で遊ばなくなり、最近まで百人一首と縁の無い生活を送って来ました。そうしたところ、昨年春に友人が「百人一首談話室」と題するブログを開設し、懐かしい百人一首を題材にブログを介した仲間との意見・情報の交換が始まりました。知的な刺激があって、これが実に楽しい！　皆様も再び百人一首を楽しまれるようにと願いつつ、今回は百人一首と百人一首談話室について、拙文を認めることにしました。

百人一首とは､歌人百人の歌を一人一首ずつ撰んでまとめた歌集です。鎌倉時代初期に藤原定家（1162-1241）が編んだ小倉百人一首が最もよく知られており、一般に百人一首といえば小倉百人一首を指します。小倉百人一首と呼ばれる由縁は、定家が娘婿である宇都宮頼綱から京都郊外の嵯峨にある小倉山荘の襖に歌を書いた色紙を貼りたいとの依頼を受け、それに応えて、百人一首を撰んだからです。
【右は尾形光琳作の「光琳かるた」の読み札に描かれた藤原定家】

百人一首の作者（歌人）は天智天皇（626-671）に始まり、順徳天皇（1197-1242）で終わる約 600 年の間に生きた 100 人です。この 600 年間は時代で言えば､飛鳥後期から奈良･平安を経て鎌倉初期までに当たります。百首の内、前後 10 首ずつくらいは飛鳥・奈良時代と鎌倉時代の歌で、残りの 8 割は平安王朝時代の歌です。作者は男性 79 人・女性 21 人で、男性は天皇 7 人・親王 1 人・貴族 58 人・僧侶 13 人、女性は天皇 1 人・内親王 1 人・貴族の母 2 人・女房（女官）17 人です。男女比、身分の配分とも絶妙のバランスであると感じます。ちなみに、百人一首の歌はおおむね年代順に配列されて番号が付されており、これを歌番と言っています。

百人一首の歌は全て､天皇や上皇の命で編まれた歌集である勅撰集から採られています。歌の内容は四季 32 首・羈旅 4 首・離別 1 首・雑部 20 首・恋 43 首となっています。百人一首の半数近い数を占める恋の歌は､その喜びを真正面から歌ったものはほとんど見られず、もっぱら、しみじみと悲しく哀れなものです。主に、詠嘆・憂悶・怨嗟・純愛・後朝の思いなどを詠っており､「みやび」と「もののあはれ」とを中心とした王朝貴族の情趣生活を遺憾なく表していると評されています。恋の次に多い四季の歌は、その半分の 16 首を秋の

歌が占めています。これは物悲しく寂しい秋を好んだ王朝貴族の美意識の表れであり、撰者の定家自身も秋を好んでいたと言われています。このように秋を好む美意識は、恋の喜びよりも切なさを詠った王朝貴族の心情と相通じるものがあると思われます。

我が国の中世以降において、和歌は勿論のこと、物語・歌謡・連歌・俳諧・大和絵・能・浄瑠璃・歌舞伎、さらには俗曲・狂歌・川柳・戯作・風俗行事に至るまで、すべての文化領域の典拠となり基礎となったのは、王朝時代の勅撰和歌であると言われています。そのエッセンスともいえる百人一首は、正に日本の文化伝統の基礎を作った600年間のアンソロジー（詞華集）と言えるでしょう。

【左は百人一首談話室に投稿された松風有情さんの絵】

百人一首が広く国民全体に普及したのは近世初期にポルトガルから伝わったカードゲームである「カルタ」にヒントを得て、百人一首がかるたの形式になったからだと言われています。百人一首かるたは、当初はゲームというよりも、歌の暗記や嫁入り道具としての用途が主だったようです。ところが、幕末頃に上の句と下の句が書かれた読み札と、下の句だけが書かれた取り札という現在の形が完成し、正月に行われるゲームとして、歌かるたが一気に普及していきました。そして､明治に入って競技かるたが成立し､名人戦やクィーン戦も行われるようになって、現在に至っています。歌かるたほどではないにしても、漫画を含めた様々な解説書や注釈書も百人一首の普及に一役買ってきました。さらには、百人一首はしばしばテレビでも取り上げられており、現在もNHKの Eテレで「趣味どきっ！　恋する百人一首」が放映中です。

さて、次に私どもが「百人一首談話室」と称するブログで、どのように百人一首を楽しんでいるのかをご説明しましょう。ブログ開設者である友人は開設の趣旨を大略、次のように記しています。「百人一首は日本の古典・文化の目次みたいなものでしょうか。7世紀半ばから１３世紀半ばまでの600年間の歴史が詰まっています。百人の歌を一首ずつ読んでいくと歌の背景にある政治・社会情勢とその中で生きる人間模様がまざまざと蘇り興味がつきません。百人一首を2～3冊本を読んだだけですましてしまうのは勿体ない。もっともっと掘り下げて徹底的に楽しもう！というのがこのブログの趣旨です。・・・ブログ名を『百人一首　談話室』としたのは、百人一首を媒体とした楽しく知的で品のいいトーキングサロンみたいな場になればいいなあと思ったからです。・・・」

ブログは昨年3月にスタートし、3月中はウォーミングアップとして、開設者が百人一

首全般についての基礎知識を説明してくれました。4 月から当初は週 2 回、現在は週 1 回月曜日に、百人一首を歌番の順に一首ずつ取り上げ、まず開設者が解説を施します。その後、フォローアーである私どもがコメントを投稿し、そのコメントに対する質問や追加コメントは誰からでも自由です。ブログではハンドルネームを使うことにしており、開設者は百々爺と称し、私は百人一首作者の中で憧れの 2 人である源融と在原業平、そして自分の名前を組み合わせて、源智平朝臣と称しています。

百々爺の解説は、歌の訳詩・作者・出典等の基本項目を記した後、歌が詠まれた当時の歴史的背景・作者の経歴・作者の人物相関関係・歌の評価や感想、そして源氏物語との繋がりなどを自らの感想も交えて、自由に記しています。私は歴史好きで、作者や作者の人間関係に興味があるので、そうした事柄に関する面白そうな情報をネットで探し出して提供するほか、歌に対しては率直に自分の感想を投稿しています。

私以外のフォローアーのコメントも実に様々で、とても有益なものや面白いものが沢山あります。例えば、①能に詳しく、歌がどう謡曲に折り込まれているかを解説してくれる百合局さん、②成人大学やカルチャーセンターで学んだ関連知識を投稿してくる小町姐さんや八麻呂さん、③歌を素敵な絵にして投稿してくる松風有情さん【右の絵】、④歌に触発されて作った川柳や狂歌を投稿してくる枇杷の実さん、④歌に絡めて最近のニュースや世相を投稿してくる文屋多寡秀さん、といった具合です。コメント数は毎回 20 件前後に上っており、百人一首談話室は、百々爺の期待通り、楽しいトーキングサロンになっています。

百人一首は昨年取り上げた源氏物語より遥かに入りやすいと思います。ここまで読まれて、百人一首に興味を持たれた方や百人一首を懐かしく思い出された方は、一度、インターネットで百人一首談話室を覗いてみてはどうでしょうか。談話室では「読み進め方について」や「参考書」の欄で、百人一首の解説書等も列記しており、そこで勧めている本を買い求めて読めば、容易に百人一首の世界に入っていけます。さらに、談話室は閲覧だけでなく、投稿も自由なブログなので、ハンドルネームを作って投稿されれば歓迎されるでしょう。

最後に、「百人一首と海外ボランティアと何の関係があるの？」と問われそうなので、私の考えを記せば、我々日本人は何処にいて何をしていても、日本文化の源を学ぶことが大切だし、楽しくもあると思います。百人一首談話室は海外でも閲覧・投稿とも自由です。また、赴任の際に、例えば「田辺聖子の小倉百人一首」などを持参され、赴任先で毎日一首分ずつ読みながら、（もし、まだなら）赴任中に百人一首を全部暗誦してしまうこともお勧めです。百人一首の中で、唯一海外で詠まれた歌である安倍仲麿の「**天の原ふりさけ見**

れば春日なる　三笠の山に出でし月かも」を唱えて日本を思いながら、百人一首を楽しまれるのも、おしゃれではないでしょうか。

新春報告

JICA　青年海外協力隊発足五十周年記念式典に参加して

～当 ICT 海外ボランテイイア会が JICA 理事長特別表彰を授賞～

ICT 海外ボランティア会事務局

標記記念式典は、天皇陛下、皇后陛下ご臨席のもと、去る 11 月 17 日（火）、パシフィコ横浜国立大ホールで開催されました。同日これに先立ち、JICA 横浜で行われた JICA 理事長表彰として当 ICT 海外ボランティア会 が特別表彰を授賞しましたので、その様子を報告いたします。

当日は快晴、まさに日本晴に恵まれました。記念式典には 青年海外協力隊（JOCV）OB・OG やシニア海外ボランティア（SV）OB・OG をはじめ、国の内外から 4,500 名の参加者があり、大ホールははちきれんばかりの祝賀ムードに蔽われ、厳粛且つ壮大なものでした。参加者は同じボランティア経験者・関係者とのことで、ボランティア任地の民族衣装を身につけるなど、独特の和やかなムードがありました。

私は座席確保のため 2 時間前に開場に入場しましたが、フランスでのテロ騒ぎ直後のこととて、セキュリティチェックは厳重で、空港でのチェックそのものでした。

司会の 2 名は民間放送のアナウンサー、国歌独唱は高校の音楽教師で、共に JOCV の OB. OG とのことで、堂々たるものがありました。

第 1 部は、天皇皇后両陛下ご臨席のもと、厳粛にとり行なわれました。北岡伸一 JICA 理事長式辞、来賓祝辞として内閣総理大臣（木原外務副大臣代読）および日本の国際協力を支援する国会議員の会額賀衆議院議員等がありました。

第 2 部は、打って変わって寛いだ華やかな雰囲気でした。ドラムと歌の民族音楽には、JOCVOG も加わり力強く且つ華やかでもありました。パネルトークには就任間もない鈴木大地スポーツ庁長官や、50 周年イメージソング「ひとりひとり」の合唱には高橋尚子さんも加わっていました。また JOCV 活動を題材にした映画「クロスロード」の監督すすきじゅんいち氏（JOCVOB）から、映画作成の経緯や内容の紹介がありました。（後刻この映画を観た当会山崎幹事の感想は「涙・なみだ」だったそうです。）最後は、隊歌「若い力の歌」の斉唱で締め括られました。

この記念式典に先立って、同じ横浜ミナトミライにある JICA 横浜で、JICA 理事長表彰として、クリスタルガラスの記念盾授与の栄誉に与りました。

盾は「感謝～そしてミライへ～　50th青年海外協力隊」「ICT 海外ボランティア会」「青年海外協力隊事業 50 周年に際し、これまで青年海外協力隊事業を支え、その発展に貢献いただいたことに感謝を表します。」等と刻んでありました。被表彰者は JOCV の都道府県別・派遣国別等凡そ 90 グループでした。

なんとも晴れがましく、胸のふくらむ誇らしげな一日でした。ここに当「ICT 海外ボランティア会」のメンバーおよびご支援をいただいている皆様のお陰かと、心から感謝申しあげます。（写真は JICA ホームページより転載）

（文責加藤隆）

特別寄稿

横糸を通して物を見る

ICT 海外ボランティア会顧問　石井　孝

【真藤 恒氏語録】

物を作る以上、パターン・モジュールがある。それが、同じようなものを、半盲目的に、ラッキョウの皮をむくみたいに図面に画いている。つまり、同じようなもの横に通して見ようということをしていない。縦に見た標準化はやっていても、横に眺めたらどうだろうとやって見ると、縦だけの標準図では役に立たないことが明瞭になる。

いままでその態度、個人の流儀の縦だけの頭だったのを、横に通して見るという眼力があれば、この考え方はいっぺんで理解できる。横糸でつなぐという技術的な思想がないということは、根本的には寺子屋教育で、自分だけが優越感を持ちたいという日本人の個人主義であり、最大の弱点である。

【石井　孝氏のひと言】

まとまったソフトウエアを仕上げる度に真藤さんに報告することが慣わしになっていた。すると、いつも怒られたものである。「また、一から作ったのだろう。ただ作ればいいというものではない。ソフトウエアを部品化しておいて再利用することを考えろ」

真藤さんは巨大タンカーを造るにあたり、あまり大きすぎて通常のドックでは造れない。いくつかのブロックに分解して造り最後に組み合わせる。この際、共通して使えるブロックをうまく用意して置くと顧客の個別注文に素早くこたえつつ、しかもコストダウンが図れる。ソフトウエアも同様にできる筈だと考えていた。

しかし、これは難問で真藤さんの宿題に答えられずに終わった。ハードウエアのブロックの場合は、物理的サイズや電気的定格を合わせておけば、ブロックをはめ合わせるだけで、原理的にはトータルシステムを構成できる。ソフトウエアも、機能単位にブロック化して作るが、ブロック間は単純にはめ合わせるだけで済むというわけにはゆかず、ブロック相互間の論理的なインターフェイス処理と全体を通して論理的矛盾がないかをチェックする必要がある。プログラムブロック相互の編集処理を行うコンパイラーのようなツールも手がけたが、汎用的なものを創ることは出来なかった。

未だに夢の中で、「何をぐずぐずしているのか」と叱れている。

海外グラフィティ

ラマンチャの男

日本ベンダーネット社長　エッセイスト　　田上　智

帝国劇場のミュージカル「ラ・マンチャの男」を観た。聖書の次に読まれているといわれる「ドン・キホーテ」をベースにしたものだが、主演松本幸四郎が 1965 年から演じているもので、上演回数も実に 1,200 回を超える。

ラ・マンチャとは、スペインのラ・マンチャ地方を指す。実在かどうかは定かではない。内容は、16 世紀の末、スペイン、セビリアの牢獄が舞台だ。教会を侮辱した罪で、主人公セルバンテスが従僕のサンチョ・パンサともども入牢したのだ。

入牢歓迎とばかり、新入りを牢名主以下囚人が「裁判だ」といじる。そこで考え付いたのが、囚人全員を配役した寸劇だ。中身は「ドン・キホーテ」そのもの。

ドン・キホーテの内容をここで、繰り返すつもりはない。作者セルバンテスの数奇な生涯が、この奇妙な物語を生み出した，否、69 歳で生涯を閉じる前の 10 年間でやっと作家として日の目を見たというべきだろう。物語の構成は荒唐無稽だが、その実、人生に対する態度はすこぶるきまじめである。そこが、聖書の次に読まれている所以だろう。

騎士に憧れ、女性を敬う。ヨーロッパ中世の騎士道とは、こうだったのだろうと予想は出来る。道中、宿屋を城に見立て、人の好い宿屋の主人を城主とみなして、騎士になる儀

式を執り行うべく依頼する。そして、宿屋の下女を姫としてあがめる。

確かに、みな理想の人生を夢見る。しかし、現実は理想とかなりかけ離れている。しかし、そこで、「現実に流されて理想を失いがちになるのを何とか踏ん張る態度が大事なのだ」と。作者セルバンテスは、下級貴族で貧しい外科医の次男として生まれたが、年少から大の読書好きであった。有名なレパントやアルマダの海戦にも従軍、負傷したりもした。後に、徴税吏の仕事に就くが、集めた税金を預けていた銀行が破産、莫大な負債を負うことにより、未納のため、投獄されたりもした。その牢獄で着想したともいわれる「ドン・キホーテ」が爆発的な売れ行きとなるともに評判を得た。前半生の恵まれない人生を、後半、理想を狂気のように追い続けることにより努力して、夢を実現、ようやくにして、報われたというべきだろう。

作者セルバンテス自身も次のようにドン・キホーテに言わしめている。「人生自体が狂気じみているとしたら、一体本当の狂気とは何だ、本当の狂気とは。夢におぼれて現実を見ないのも狂気かも知れぬ。現実のみを追って夢を持たぬのも狂気だ。だが一番憎むべき狂気とは、あるがままの人生に折り合いをつけて、あるべき姿のために戦わないことだ。」こうあるべきというビジョンに向けて誰が何を言おうが、理想に向けて頑張るという、ドン・キホーテそのものの生き方ではないだろうか？

騎士といえば、私と出会った二人の英国人の knight（ナイト）を思い出す。一人はブリティッシュテレコムのチェアマン。NTT 時代に帝国ホテルで接待したが、悠揚迫らぬその態度に「knight とはかくなるものか」と感心したのを覚えている。もう一人は、サー・アーサー・C・クラークだ。言わずと知れた著名な SF 作家で、「2001 年宇宙の旅」は映画化されて彼の他の作品も一挙に有名化となった。私がスリランカテレコム勤務の際、知り合い、「スリランカから世界を眺めて」という彼自身の著作を 2 週間借りたことがある。その頃は、時間の問題と言われながら、まだ大英帝国勲章（CBE）しか授与されず、私がスリランカを去った後にようやく knight の称号を得ている。騎士はやはり、憧れの的であり、郷士（ごうし）の身分のドン・キホーテも欲しくてたまらぬ称号だったのだ。日本でも江戸時代、豊かな村役人が「苗字・帯刀」にあこがれるのと同じだ。

松本幸四郎は 1969 年からこの「ラ・マンチャの男」に取り組み、実に上演回数が 1207 回を数えるに至った。出身大学が同じということもあって、市川染五郎の時代からのファンだが、魂が込められた舞台を見ていると「ライフワークに出会った男の幸せ」とはとさぞかし満足だろうとうらやましくて仕方がない。

新春特集

電電公社および NTT 民営化直後の海外技術協力活動の実績

ICT 海外ボランティア会事務局長　加藤　隆

１．協力活動の 3 分野

①　海外の研修生受け入れ（1955 年～1995 年）

年間約 50 数ヵ国から約 150 名を受け入れ、累計で約 120 ヵ国から約 6,000 名である。

（「NTT の 10 年〔1955～1995〕による）

② 海外技術専門家長期派遣（1960 年～1998 年） 678 名

派遣者は JICA から電電（NTT）への要請により人事異動による任用として派遣された。

内訳は、JICA 長期専門家延 504 名、ITU 長期専門家延 65 名、コンサルティング（クウエイト）延 69 名、電電（NTT）自主長期専門家延 25 名、JTEC 延 15 名である（長期専門家の任期は 1 年以上、任期平均 2 年強）。 その他 短期専門家は多数派遣されている。1999 年 JICA の制度改正により JICA 長期専門家は「シニア海外ボランティア(SV)」へ移行した。SV の場合は電電（NTT）OB で、個人意思により応募し毎年若干名が派遣されている模様である。

（「専門家派遣状況 国際本部門企画担当」の派遣者名簿による）

③ 青年海外協力隊への参加支援（1966 年～2010 年）

派遣者は、当初人事異動により派遣されたが、その後 JICA の募集に対し個人意思により応募して派遣される方に、特別休暇扱いを適用するなどして支援した。

派遣者は 49 ヵ国 490 名（任期 2 年）で、現在も少人数ではあるが続いている。

（「NTT 東京青年海外協力会」の資料による）

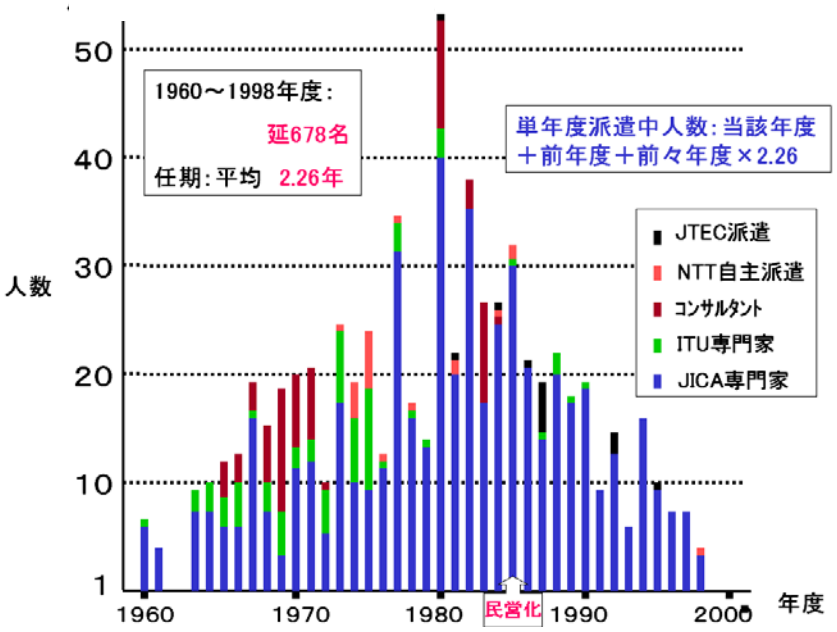
２． 海外技術専門家

海外技術専門家は、前述の技術協力専門家に加えて、コンサルタントや電電（NTT）の自主派遣専門家がある。

海外技術専門家のうち、1 年以上の長期派遣の状況を 「図１」に掲げる。図中の人数は、当該年度に派遣された人数である。平均の任期は 2 年強なので、当該年度に派遣中の総人数は、この人数に加えて少なくとも前年度派遣の人数を加えた数になる。これに加えて短期派遣者（1 年未満）も多かった。

長期派遣者 678 名のうち、JICA 専門家は 504 名で、凡そ 3/4 を占めており、続いてコンサルタント 10%強、ITU 専門家が 10%弱を占めている。1960 年から派遣が開始され、その数は次第に増加し、ピークは 1981 年で凡そ 77 名が活動していたが、その後減少している。電電の民営化後も続いたが、通信の自由化に伴い通信事業者における NTT の位置づけが変り、

図１．海外技術専門家長期派遣者の推移



専門家派遣状況（海外協力関連名簿 国際本部企画部門）を基に作成

またJICAの制度変更に伴い専門家としての派遣は実質上なくなった。それに代って、シニア海外ボランティア制度が発足し、派遣対象者の大部分は会社の退職者となった。

海外技術専門家長期派遣者のうち、JICA専門家504名の「地域、国」（1960年度～1998年度）派遣の様子を「表1」 に示す。　派遣先は46ヵ国で要請案件の殆どが電気通信技術関連である。

政府方針により、当初は戦後賠償の意味合いがあったことから、アジア地域派遣が全体の40%を占め、その中でも、タイ・インドネシア・ パキスタン・フィリッピンが多い。中南米ではペルー・メキシコ・グアテマラが、また中近東・アフリカではケニア・イランが多い。これらの国では、訓練センターや研究センター設立など、日本国政府によるプロジェクト型の技術協力に従事している。

表１．JICA専門家派遣　（地域・国別）

地　域	人　数 （比率%）	国　数	国　別　人　数
ｱｼﾞｱ ・ 大洋州	２１５ （４３）	１１	ﾀｲ65、ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ52、ﾊﾟｷｽﾀﾝ33、ﾌｨﾘﾋﾟﾝ27、 ｼﾝｶﾞﾎﾟｰ13、ｶﾝﾎﾞｼﾞｬ11、ﾏﾚｰｼｱ5、ｽﾘﾗﾝｶ４、 ﾌｨｰｼﾞｰ・中国各2、ﾗｵｽ１
中南米	１９７ （３９）	１７	ﾍﾟﾙｰ33、ﾒｷｼｺ23、ｸﾞｱﾃﾏﾗ21、ﾊﾟﾗｸﾞｱｲ20、 ﾎﾞﾘﾋﾞｱ14、ﾊﾟﾅﾏ12、ﾁﾘ11、ｴｸｱﾄﾞﾙ10、 ｺﾛﾝﾋﾞｱ9、ﾎﾝｼﾞｭﾗｽ8、ﾌﾞﾗｼﾞﾙ7、ﾄﾞﾐﾆｶ共和国5、ｱﾙｾﾞﾝﾁﾝ3、ﾖﾙﾀﾞﾝ・ｴﾙｻﾙﾊﾞﾄﾞﾙ・ﾍﾞﾈｽﾞｴﾗ各2、ﾆｶﾗｸﾞｱ１
中近東・ｱﾌﾘｶ	９２ （18）	１８	ｹﾆｱ19、ｲﾗﾝ17、ﾖﾙﾀﾞﾝ11、ｻｳｼﾞｱﾗﾋﾞｱ7、 ｴﾁｵﾋﾟｱ・ﾄﾙｺ・ｸｳｴｲﾄ各6、ﾀﾝｻﾞﾆｱ4、ｻﾞﾝﾋﾞｱ・ ｽﾜｼﾞﾗﾝﾄﾞ各3、ｽｰﾀﾞﾝ・ｴｼﾞﾌﾟﾄ・ｳｶﾞﾝﾀ各2、 ｲﾗｸ・ﾅｲｼﾞｪﾘｱ・ﾘﾍﾞﾘｱ・ｼﾞﾝﾊﾞﾌﾞｴ・ｱﾙｼﾞｪﾘｱ各1
計	５０４ （１００）	４６	

専門家派遣状況（海外協力関連名簿 国際本部企画部門）を基に作成

トピック　JICAから「国際協力特別賞」を受賞

1994年7月、JICAが設立20周年を記念して創設した「国際協力特別賞」に、NTTが中心的役割を果たしたタイ国モンクット王工科大学協力事業、シンガポール国ソフトウエア技術センタプロジェクトの2つが選ばれ、表彰された。

前者は1960年から1993年にかけて実施した事業で、当初は電気通信訓練センターだった同校を工科大学まで発展させた一翼をNTT社員が担った。また後者は1980年から1991年にかけて2回に分けて実施したもので、同国のソフトウエア技術者育成に大きな貢献を果たしたプロジェクトである。（「NTTの10年」〔1955～1995〕による）

また電電の総裁（当時）等関係者が、タイ国ではモンクット王工科大学協力事業への貢献により、国より叙勲、国王より感謝状、同大学より名誉博士号を授与されている。同様にパラグアイ国でもマイクロ波回線コンサルタントの功績で国より叙勲がなされている。

３．　青年海外協力隊

青年海外協力隊派遣の状況を 「図 2」に掲げる。図中の人数は当該年度に派遣された人数ある。任期は 2 年なので、当該年度に派遣中の総人数は、この人数に加えて少なくとも前年度派遣の人数を加えた数になる。

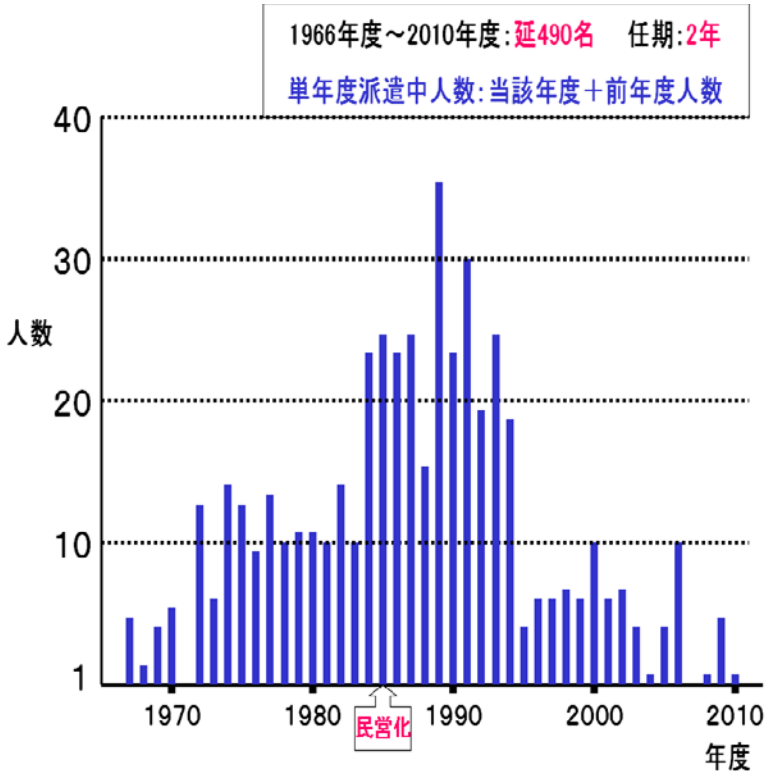
1967 年から派遣が開始され、2010 年までの派遣者数は 490 名である。

その数は次第に増加し、ピークは 1989 年には凡そ 49 名が活動していたが、技術専門家と同様に電電の民営化後も続いたが、通信の自由化に伴い通信事業者における NTT の位置づけが変ったが、その後も少人数ではあるが続いている。

青年海外協力隊派遣先の「地域、国」(1960 年度～1998 年度) の様子を「表 2」に示す。　派遣先は 49 ヵ国で要請案件は、殆どが電気通信・情報通信技術であるが、その他村落開発、体操・理数科教師、看護士・助産婦・保健婦である。

派遣先は技術専門家の場合と異なり、現地からの要請が多い中近東・アフリカへの派遣が半数を占め、その主な国はザンビア・ケニア・ガーナ・タンザニアである。

図２．青年海外協力隊派遣の推移



続いてアジア・大洋州には全体の 1/3 が派遣され、主な国はネパール・西サモア・ラオス・スリランカ・インドネシア・ブータンへの派遣が多く、その他少人数ではあるが大洋州の島国への派遣がある。また、中南米ではホンジュラスへの派遣が多く、東欧ブルガリアへの派遣が特徴的である。

表２．青年海外協力隊員派遣（地域、国）

地　　域	人数 （比率％）	国数	国　　名
中近東・ ｱﾌﾘｶ	２４０ （４９）	１５	ｻﾞﾝﾋﾞｱ51、ｹﾆｱ38、ｶﾞｰﾅ36、ﾀﾝｻﾞﾆｱ33、 ﾏﾗｳｲ27、ﾘﾍﾞﾘｱ14、ｴﾁｵﾋﾟｱ13、 ｼﾞﾝﾊﾞﾌﾞｴ11、ﾙﾜﾝﾀﾞ・ﾆｼﾞｰﾙ各4、 ﾓﾛｯｺ・ﾁｭﾆｼﾞｱ・ﾎﾞﾂﾜﾅ各2、ｾﾈｶﾞﾙ各１
ｱｼﾞｱ・ 大洋州	１６８ （３４）	１９	ﾈﾊﾟｰﾙ・西ｻﾓｱ各27、ﾗｵｽ19、ｽﾘﾗﾝｶ17、ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ16、ﾌﾞｰﾀﾝ14、ﾏﾚｰｼｱ8、ﾌｨﾘﾋﾟﾝ7、ｳﾞｧﾂｱﾇ・ﾀｲ・ｶﾝﾎﾞｼﾞｬ各5、ﾄﾝｶﾞ4、ﾓﾘﾃﾞｨﾌﾞ4、ﾓﾝｺﾞﾙ・中国・PNG・ﾊﾞﾝｸﾞﾗ2、ﾊﾟﾗｵ・ｳｽﾞﾍﾞｷｽﾀﾝ各１
中　南　米	７９ （１６）	１４	ﾎﾝｼﾞｭﾗｽ31、ﾊﾟﾗｸﾞｱｲ11、ﾎﾞﾘﾋﾞｱ9、ﾊﾟﾅﾏ7、 ｼﾞｬﾏｲｶ5、ﾄﾞﾐﾆｶ4、ｺﾛﾝﾋﾞｱ3、ｴｸｱﾄﾞﾙ・ﾆｶﾗｸﾞｱ各2、 ｸﾞｱﾃﾏﾗ・ﾄﾞﾐﾆｶ共和国・ﾒｷｼｺ・ｾﾝﾄﾙｼｱ・ﾍﾞﾘｰｽﾞ各１
東　　欧	３ （１）	１	ﾌﾞﾙｶﾞﾘｱ3
計	４９０	４９	

「NTT グループからの JOCV 派遣国」（NTT-JOCV-OB/OG 事務局 2010 年）より作成

４．　海外技術協力のインパクト

(1)　わが国 ODA 政策に呼応し多大な尽力

わが国 ODA の理念は、時と共に変遷している。戦争賠償に一環として始められ、その後国際貢献の重要な柱となり、グローバル化の中で日本国益の確保の意味合いもあった。そして ODA 供与額の拡大と共に JICA 専門家や青年海外ボランティア（JOCV）の数も増え、電電・NTT はそれに呼応した。JICA 専門家の場合は、JICA からの一括要請に応じて、人事の一環として任用され派遣された。JOCV の場合も当初は専門家と同様の仕組みであったが、その後、職員・社員が自主的に応募して派遣され JOCV 派遣者は休職扱いとなり、電電・NTT が支援する体制がとられ現在に至っている。わが国 ODA 政策遂行における電電・NTT の役割は極めて大きい。

(2)　電電・NTT の自主プロジェクトの基盤醸成

1960 年代および 70 年代前半には、JICA 専門家と同様に ITU 専門家の派遣もあった。これら専門家の開発途上国での活動は、技術の高さ・的確さやその真摯な取り組みが高く評価され、これがコンサルテイングの要請が寄せられるきっかけとなった。日本とはビジネス環境や商習慣の異なる中での業務は至難を極める場合もあったが、これを乗越えることにより、ビジネスのノウハウが蓄積され、その後の電電・NTT の自主プロジェクトの基盤醸成に役立った。

（３）　海外人材育成と NTT の知名度向上の寄与

海外でしかも第一線での活動は苦労が付きものであるが、これは取りもなおさず 貴重な on the job training の場でもある。それでこれらの業務を通して多くの優れた

海外人材が育成された。その後彼等は優れた指導者として、電電・NTT の海外業務をリードしてきた。さらにこれらの業務を通して形成された結束やチームワークは今なお健在で、「NTT を中心とした活動グループ」は数多く、派遣国別・ボランティア種別やそれを網羅したグループがある。また同時に電電・NTT の高い技術と、現地での真摯な業務への取り組みは高く評価され、NTT の知名度向上に寄与した。

（４）　わが国電気通信産業の海外進出に貢献

このような JICA や ITU 専門家、さらには自主プロジェクトによる電電・NTT への評価は、とりもなおさず　わが国全体に対する評価にも結び付くことが多かった。また ODA による専門家派遣は直接・間接的に日本企業の海外進出を支援する場合もあった。このことからも海外協力はわが国電気通信産業の海外進出に陰ながらも寄与したと云えよう。

第 21 回海外情報談話会開催模様

事務局

標記談話会は去る 12 月 10 日（金）に、情報通信エンジニアリング協会（渋谷）において開催されました。講師は健発科学研究所所長 松本慎二氏で、話題は「海外志向・地球二周の船旅・健発科学研究所」でした。当日は 33 名の参加で、会場ははちきれんばかりでした。今回の講演は氏の豊富な経歴の中から、特に海外との係わる活躍を中心にはなされました。随所に氏の人生観が垣間見える熱のこもった講演内容でした。その概要を講師ご自身から次のようにご寄稿いただきました。

父の勤務地、戦前の上海で生まれことが私の海外志向の原点。戦後、帰国した父は、綿紡績機プラントのフルターンキー輸出に携わり、インド、タイなど、約 10 ヵ国に約 2 年間単身赴任して帰国する生活を約 30 年間繰り返した。留守家庭に届く父の手紙や写真で、海外を身近に感じた。電電公社入社後、無線部門の先輩の勧めで始めたフランス語で海外との繋がりが深まった。昭和 46 年の第 1 回テレコム 71 に派遣され、同時開催の世界無線主管庁会議にご出席の北原安定総務理事の、欧州、中近東、アジア経由の帰路 3 週間をお供した。昭和 50 年、在アルジェリア日本大使館 2 等書記官になり、ダッカハイジャック事件のアルジェでの人質解放では、現地政府や日本人社会対応に忙殺された。電電公社に復職後、世界電波規則の 20 年ぶり大改定の無線主管庁会議 79 に出席し、作業部会の議長などを務めた。その後、国際調達室長として、海外企業からの資材調達増加や政府間交渉を通じて、調達協定終結の地均しをした。電電公社・NTT では、どの仕事も面白く、真剣・全力で取り組んだので、50 代に達する頃には早く退職し、のんびりした生活に憧れた。そこで、NTT 退職時には、勧奨された会社を辞退し、自由に生きる道を選んだが、半年後に異

な事があり、入社した日本電業工作には喫緊課題が山積し、海外生産体制確立もその一つで、社員と一緒にゼロから検討を始め、中国語を学び、中国人材を集めて、3 年で上海郊外の昆山工場が稼働し、製品の価格低減の切り札になった。社長 2 期目から後任候補を探し、社長 7 年目に希望の人材を獲得し、一年後、65 歳で社長を退任し、只の相談役になった。直ちに、船旅を申し込み、「南半球一周の船旅」に娘と共に出た。船旅は安全で楽、百％気侭に過ごし、楽しく、費用は日額で 1～2 万円位。翌年、友人に頼まれ北半球一周の船旅もした。2 回の船旅中は、70 歳後の生き方を考えた。そして、私自身が 70 歳までに得

た心身の健全維持発展体験をさらに深化させて、長く人生を楽しむ方法を、科学的に研究する「健発科学研究所」を始めることに行き着いた。具体的には、食べ物、運動、生活習慣、経済力、家族、家、旅、友人関係、学ぶこと等々について調査研究し、健全に発展しながら終末を迎えることを目指している。

第 21 回海外情報懇談会開催のお知らせ

主催　ICT 海外ボランティア会
協賛　情報通信国際交流会

第２１回海外情報談話会を以下により開催いたします。どうぞ参加下さい。

日　時：　平成 28 年 2 月 19 日（金）予定　午後 3 時～5 時
場　所：　JTEC（五反田）予定
（月日・場所が確定次第 連絡させていただきます）
講演者：元通信土木コンサルタント社長　　及　川　　陽氏
演　題：「通信土木よもやま話」

講演概要：**通信土木施設とは**（1968 年＝昭和 43 年共著「通信土木施設」より）
　通信土木施設は、通信ケーブルを収容し保護するために、原則的に道路に建設される土木施設をいうもので、これには地下管路、とう道（洞道）、共同溝などの施設がある。これらはいずれも長い歴史において、社会文明の要求に応じ、科学技術の進歩とともに幾多の改善、工夫が加えられて発達したもので、10 年以上前には夢であったトンネル工法（シールド工法）による施設も構築されるに至り、ますます電気通信の発展に重要な役割を果たしつつある。

これからの通信土木を考える

2011年3月11日に発生した東日本大震災は、私にとって忘れられない出来事となった。もしこのような大地震が大都市の近くで起こったならば、インフラは相当のダメージを受け、都市機能が失われて、大混乱を生ずるであろう。来たるべき大地震にそなえて、その対策を練っておかなければならない。幸いなことに、とう道は耐震構造物である。これからの通信ルートを考えるうえで、できるだけその利用を考える必要がある。

従来構築してきた通信土木施設を、成熟した情報化社会に適応したインフラとして再構築（再構成）するに当たって、防災ルートとして大都市とう道網の活用をはかること、および繁華街における架空線路の地下化の推進をはかるべきであろう。そして施設の劣化に対する適切な維持管理によって、通信土木施設の健全性を維持することはいうまでもない。

参　加：入場無料　お気軽にどーぞ！(会員制ではありません)
参加ご希望の方は、事務局 加藤隆 info@ictov.jp　までご一報下さい

会報お読みの方々へのお願い

本会の拡充と共に、会報の充実も計ろうといたしております。

それで会報をお読みになった皆様のご感想、ご意見、ご要望は、会報作成のみならず、本会運営に当たっても大きな方向付けに役立ちます。どうぞ遠慮なくお送りいただきますようお願い申しあげます。

送付先は、編集担当　加藤　隆(kato2415@jasmine.ocn.ne.jp)，または
村上勝臣(katsumi.murakami@jcom.home.ne.jp)までお寄せ下さい。

編集後記

“新年明けましておめでとうございます”。本年も当ICT海外ボランティア会の活動に対し、ご指導、ご支援をお願い申しあげます。新年早々会報をお送りいたしますことを事務局一同幸せに存じます。

・本会報の「新春巻頭言」には恒例になりつつありますが、宮村さんからいただきました。お正月に相応しく格調の高い文には、しみじみと日本の独自の文化・伝統を感じ、日本人としての誇りを思い起します。また田上さんの海外グラフィティーはいつも気持を爽やかにしていただけます。
・電電・NTTの海外技術協力活動を報告させていただきました。これは皆様からいただきました貴重な資料を基に纏めたものです。電電・NTTからの技術協力長期専門家・青年海外協力隊 の延1,100名を超える実績は、電電・NTT内のみならず、日本政府の海外政策や産業界の海外ビジネスにも大きく寄与しており、これを幾分なりとも記録に留めるべく準備を進めております。今号ではその一端を報告させていただきました。　（以上　加藤）

・石井さんの「真藤語録」 真藤さんの造船技術のようにソフトウエア作成をブロック化できない

か。という指示を受けて悪戦苦闘した経験、大変だったと思いました。
・加藤さんから「JICA　青年海外協力隊発足五十周年記念式典」参加報告して頂きました。当会が表彰された事嬉しく思います。JICA 東北も来年 2 月式典開催予定なので私事参加する予定です。
・また、加藤さんに電電・NTT の JICA、ODA に関する協力実績を定量的に報告して貰い大変参考になりました。タイミング良く作成して貰い良い記録と思います。ご苦労さまでした。（以上 村上）

総編集長：ICT 海外ボランティア会　事務局長　加藤　隆
編 集 長：ICT 海外ボランティア会　広報部長　村上勝臣
報道部長：ICT 海外ボランティア会　報道部長　山崎義行

発　　行：ICT 海外ボランティア会　（メール：info@ictov.jp）